

研修医が作った

地域医療新聞

7月20日から紀南病院でお世話になっています、市立四日市病院研修医2年目の大森拓です。この地方独特の湿気や、宿舎の居間に出没する蜘蛛の多さにもようやく慣れてきました。

私が紀南病院内科での地域医療研修を希望した理由は、市立四日市病院での内科研修は検査の手伝いでほとんど日中は時間を取られてしまい病棟業務を経験する機会があまり多くなく、来年度以降の病棟での仕事に不安を覚えたからでした。研修医の間に少しでも多く病棟の仕事を。この思いで紀南病院を希望しました。この記事を書いている時点で研修が始まり2週間が過ぎましたが、その点で毎日とても充実した研修をさせていただいています。慣れない病棟業務をしながら気付いた事は、患者さん一人一人の生活環境や周囲の人間関係がそれぞれ異なっており、治療や退院調整をする上でそれらの事柄を全て踏まえて考えなければならない点でした。一人暮らしなのに退院して大丈夫だろうか、みかんの世話をしないといけないのは分かるけど今退院するのはとても無理です、と、患者さん一人一人に対して、入院した原因以外のところでも頭を悩ませる機会が多い事に驚きました。

先週末には車で潮岬までドライブし、紀南地域の自然を肌で感じてきました。熊野古道など周りには名所が多くあるため、週末などを利用してさらにこの地域を満喫したいと思っています。お盆までこちらで研修させていただく予定です。どうぞよろしくお願い致します。

7月から紀南病院の内科を、病棟と救急外来中心に担当させていただいております。人の生死がめまぐるしく行きかう医療の現場では、やはり常に緊張感があり、多忙であり、時に疲弊という言葉が合うように感ずるときもあります。一方で事務方の皆様の和やかな雰囲気にも癒されております。

ここに来て感じているのは僻地だからどうだということではなく、結局、すべてが同じ人間の営みだということです。患者さんはどこにしようが病気で苦しんでおられる方。病院はどこにあるうがそのニーズに高水準でこたえるべきところ。医局という組織はどこにあるうが社会の縮図(！？)。根底に流れているものはどこでも変わらないなあと改めて感じているところです。

【東京大学 澤本】



写真：丸山千枚田にて
左から澤本、加藤、青木（7月2週まで）福田

6月からお世話になってます研修医の福田です。紀南病院にきて2ヵ月が経ちました。遠方の診療所にも行かせて頂く機会があり後半1ヵ月はあっという間でした。当初の個人的な目標だった胃カメラやエコー等の手技、病棟や救外での1人立ちはまったくといっていいほど達成できてませんが、地域の医療・地域を知るは少しは実感できた気がします。地域の人はたくましく我慢強いんですね。無医村のおばあちゃんの話ではインフルエンザ?そんなもん知らんわ。風邪なんて誰もひかんよ、ひいても分からんわと。たぶんこんな方は採血しても異常値なんて一つもないんだなと思いました。

また医療提供者側も限られた医療資源をどのように分配すればいいか考えさせられました。病院・介護施設運営とか気になりますが、まずは日頃の検査をむやみに出さないことです。

梅雨もあり海水浴・パラグライダーに行けなかったの残念ですが、代わりにお寿司やハウスみかんで満足しました。

今、速玉大社の招福厄除の籬の大樹の葉を財布に忍び込ませて帰る途中です。2ヵ月間でしたが、先生方はじめ病院スタッフの皆様には大変お世話になりました。本当にありがとうございました。

紀南病院での2ヶ月間の地域医療研修中、いろいろな場所に行きたくさんの人に出会いました。その中でいつも思うのは、この地区の人々は穏やかだけど強い!ということでした。便利な所でなくても、その中で明るく生活していく力を持っておられます。～救急外来でのひとコマ～

(ある男性が大腿骨頸部骨折で運ばれ、手術が必要と知って) 男性：「あ～これはえらいことになってしもたなあ～」男性の妻：「何言ってるの、自分の不注意や!」

町の方々のパワーに触れるたび、自分も小さなことで悩んでいないでもっと強くなりたいと思うのでした。

紀南病院で研修してみると、自分の知識のなさ、経験のなさが身にしみる毎日でした。それでも指導医の先生、周りの看護師さん、技師さんの動きをみながら本を漁り、自分で試していくうちに、ひとつずつ新しいものを得ていく喜びはそれだけ大きいということも分かりました。3年目にむけてこれからの研修医生活、どうせ過すなら恐れずに進もうと言いつけています。

病院の皆さま、温かく見守ってくださってありがとうございました。【加藤】

編集：加藤奈津子 記事：澤本 尚哉，大森 拓，福田 晋也